

台密における円密一致思想・「伝法聖者闕略」について

——安然・仁空の思想を中心に——

土 倉 宏

日本天台・台密においては円密一致が綱格とされている。円密一致とは、法華等（円教）と大日等（密教）が同等であるとする思想であり、台密に見られる独特の思想である。台密における円密一致の考え方は、安然（9世紀後半）によってその大枠が決定されたといえる。例えば安然の『菩提心義抄』

卷二で述べられる次の箇所が円密一致思想の代表例といえる。

問。円人修^二無作六度^一化^二無作十界衆生^一。与^下今真言修^二如来秘密十度^一化^中真如十界衆生^上同異云何。答。事理雖^レ同而行相少異。……是名^二宗事理同一也^一。行相異者、天台十法成乘以爲^二円人行法^一、真言三種秘密以爲^二真言行法^一。天台四種三昧法云^二身開遮、口說默、心止觀^一。此等与^二三密^一意義雖^レ同行相各異。真言亦有^二發菩提心乃至順道法愛不生^一。此与^二十乘^一名義雖^レ同行相亦異。（日藏四三・五〇一上〜五〇二上）

天台の止観行（十法成乘、四種三昧）と密教の三密行とは、それぞれ行の相は少し異なるが、行の意義は同じなのだ、としているのである。この安然の考え方を一つの術語に置き換え

れば、理同事異^①ということになる。理同事異は台密の円密一致を代表する考え方であり、これは安然によって明確にされたものといえる。

では台密において、理同事異という考え方の他にも円密一致の考え方は存するのであろうか。安然自身において、また仁空（14世紀）においても、その別の考え方が確認できる。例えば仁空の『義釈搜決抄』卷二之六には、理同事異とは異なる次のような表現が見える。

何^二況^一付^二仏説^一ニ唯理秘密事理俱密ノ差別モ不^レ可^レ有^レ之。伝法聖者流伝^二門^一付^二テ事理ノ差異ノ出来スル趣ヲコソ処々ニ被^二テ沙汰^一有^二ルナリ^一。（天全十三・七〇二下）

仏説については唯理秘密・事理俱密の差別はなかったが、「伝法聖者」流伝の問題で唯理秘密・事理俱密の差異が出来たのである、と。台密では円仁以来、三密行を説かない法華等（円教）を唯理秘密とし、三密行を説く大日等（密教）を事理俱密として分ける考え方がありますが、ここで仁空は、その差異

は「伝法聖者」流伝の問題に出来するのであり、仏説においては唯理秘密・事理俱密の差別はもととない、とするのである。つまり仏は法華等の經を説いた時、三密行をも共に説いたのだが、「伝法聖者」がその三密行を書さなかったのだ、というのである。これは、先に挙げた止観行と三密行の意義を同等として円密一致を図る考え方―理同事異の考え方とは異なる、いわば理同事同ともいふべき側面を持つ円密一致の考え方なのである。

仁空は自らの書の中でこの「伝法聖者闕略」なる問題を頻繁に取り上げ、円密一致を繰り返し展開するのであるが、「伝法聖者」とは何であろうか。「伝法聖者」とは、仏の法を聞き、それを經として結集し伝える聖者、菩薩のことである。「伝法聖者」は、「伝法菩薩」、「伝法者」、「結集菩薩」などと表現されることもあるが、仁空はしばしば「伝法聖者」と表現して論ずるのである。この「伝法聖者」が仏の説いたことを（經を結集する際に）書さなかった、ということが「伝法聖者闕略」という問題である。「闕略」はまた「闕而不書」とも表現される。

仁空が頻繁に取り上げた「伝法聖者闕略」の問題を考えるに当たっては、円仁の書にまで遡るべきであるが、主要な部分ではやはり安然の書が直接関わってくる。安然は『教時問答』巻二において次のように述べる。

問、伝法菩薩誰耶。答、若約^二結集主^一者是金剛手、若約^二結集伴一者亦通^二阿難^一也。問、何以知^レ之。答、金剛頂疏云、仏於^二六波羅蜜經中^一……総聞唯在^二侍者阿難^一……若爾者応^レ云^二阿難亦知^二秘教^一……故知阿難亦從^二大日如來^一總聞^二秘教^一。（大正七五・四〇七下・四〇八上）

安然は經典結集者の阿難を「伝法菩薩」と呼び、大日如來より秘教を聞き、秘教を知った、としている。また『教時問答』巻一では「結集菩薩」文殊等について次のように述べる。

彼菩薩大藏經是華嚴經^レ広本。大日義釈多引^レ為証。然機有^二淺深^一、教有^二顯密^一。故於^二一經^一顯機聞^レ為^二華嚴經^一、密機聞^レ為^二胎藏教^一。例如下^二仏在^二他化天^一說^二般若理趣分^一時、顯機聞^レ為^二般若十六分中第十理趣分^一也、密機聞^レ為^二金剛頂十八會中第六理趣會^一上^二也。結集菩薩隨^レ機結集。文殊等結^レ為^二顯教^一、金剛手等結^レ為^二密教^一。（大正七五・三九一下）

同じ仏説であってもそれを聞き、受け止める側の菩薩に、顯機の菩薩（文殊等）と密機の菩薩（金剛手等）の違いがあり、例えば顯機の菩薩は仏説を華嚴經と為し、密機の菩薩（金剛手等）はその同じ仏説を胎藏教と為す、として、仏の説を聞く「結集菩薩」の機によって顯教・密教の違いが出てくる、と述べている。安然は次に、この「結集菩薩」を「伝法菩薩」と表現しつつ、「伝法菩薩」はその機の故に、仏説である三摩地の法を書さなかった、として、『菩提心義抄』巻一末におい

て次のように述べる。

凡説「真如法性」教皆名「真言」故、凡法華等諸大乘皆名「真言秘密教」也。唯法華等皆雖レ説「此三摩地法」、而伝法菩薩闕而不レ書也。
(日藏四三・四五九・上)

つまり、仏は法華等においても三摩地の法を説いたのだが、結集に際して「伝法菩薩」はその三摩地の法を闕して書きなかつた、というのである。この『菩提心義抄』巻一末の「伝法菩薩」は、同・巻四末において「伝法聖者」文殊・弥勒等という具体名をもつて再び展開される。

円教名「理秘密」、真言事理俱密。然菩提心論云下是説「三摩地法」、於三諸教中一闕而不レ書者、是仏雖レ説之、而伝法者闕而不レ書。何況円人初住已入「秘藏」、秘藏自具「事理俱密」、自得「真言自他五種灌頂之法」……問、天台円教仏説「此灌頂法」、可レ名「事理俱密」、何名「理秘密教」。伝法聖者闕而不レ書、是誰闕之……答、天台円教唯隨「顯了」、名「理秘密」。若約「隱密」亦有「事密」。彼仏説中雖レ名「顯了」、三密事法隱密未レ伝。非レ同下仏以「密意」不「顯了」説上……金剛頂疏六波羅蜜經……故知、文殊弥勒諸大菩薩、結「諸大乘」之時、真言秘義闕而不レ書。
(日藏四三・五九〇上・五九一下)

ここで安然是『菩提心論』を挙げながら、法華等の經においても仏は三摩地の法を説いたのだが、「伝法聖者」文殊・弥勒等が結集の際、その三摩地の法、真言秘義を書さなかつただけだし、さらに円人の初住は已に秘藏に入り、秘藏は自ず

から事理俱密を具し、真言の自他の五種灌頂の法を得る、としている。また、天台円教は顯了（經の文面に顯れた面）に随えば理秘密だが、隱密（經の文面に顯れない面）に約せば事密である、とし、法華等は顯了と名づけ、そこにおいては三密の事法は隱密にして未だ伝えられてはいないのだが、それは仏が密意を以て顯了しなかつたというのとは違うのである（「伝法聖者」が書きなかつただけなのである）、としているわけである。この安然の提示した「伝法聖者闕而不書」^③によって、隱密という条件付きながら、法華等における「三密の事法」具足の地平が開かれた形となったのである。

このような安然の「伝法聖者闕而不書」論は、仁空に大きく受け継がれ、しばしば「伝法聖者闕略」という表現で取り上げられた。例えば『義釈搜決抄』巻一之一には次のようにある。

三密ノ行相ヲ不レト説云ハ仏非レ不レルニ説之ヲ。伝法ノ聖者ノ闕略シタリト五大院ハ釈シ給フ也。仍テ世俗勝義円融不二ノ義ヲ明シ。説ニ中道実相ノ理ヲ云程ノ經ニハ。必ス三密四曼ノ事ハ備リテ。於ニ仏説ニ者闕タル処ナカリケルヲ。結集ノ時於ニ諸大乘ノ中ニ其ノ行相ヲ闕シタルヲ。自ニ仏意ノ事起テ彼諸經ノ中ニハ不レト説之ヲ思フ。是ヲ顯經トテ不レト及ニ真言ニ思タル也。菩提心論ニ唯真言法中即身成仏ノ故ニ。是レ説ニ三摩地ノ法ヲ。於ニ諸教ノ中ニ闕テ而不レ書ト云ヘルハ此ノ事也。闕而不書ト者。伝法ノ聖者結集シノコシタ

台密における円密一致思想・「伝法聖者闕略」について（土 倉）

リト云事也^ト。五大院ハ得玉フ也。（天全十・二八上^下）

つまり、五大院（安然）が釈したように、中道実相の理を説くという程の経には、三密の行相、三密四曼の事は備わっていたのだが、結集の時に、「伝法聖者」が結集し残したのだ、というわけである。同じく『義釈搜決抄』巻一之一には次のようにある。

伝法ノ聖者闕ニ略ス之^ヲ。故ニ教ノ体ニハ所^レハ闕無レトモ。弘伝ノ經ノ面ニ三密ノ事ヲ闕略スレバ。且ク唯理秘密ト云ニテコソアレ。一切ノ円融ノ理ヲ説ク程ノ經ハ。悉ク真言經ニテ可^レト有五大院ハ得玉フ歟。（天全十・三一上）

一切の円融の理を説く程の経は悉く真言經であり、もともと三密の事を備えたが、「伝法聖者」が闕略してしまった、という意と考えられる。また『義釈搜決抄』巻一之三には次のようにある。

華嚴法華等ノ諸大乘經ト云ハレ。大日金剛頂ノ等ノ真言經ト云事ノ相分ル、事ハ。伝法ノ菩薩ノ流通ニ成ル時ノ不同也。真如法性ノ理ヲ説ク程ノ經ニ。必ス三密四曼ノ事ヲ説ク故^ニ。於ニテハ仏会ノ儀式ニ者全ク理密事密ノ差異不^レ可^レ有^レ之。五大院ハ治定セラル、也。（天全十・一三三上）

真如法性の理を説く程の経には必ず三密四曼の事が説かれたのだが、「伝法菩薩」が闕略してしまった、という意である。さらに、仁空『遮那業案立草』巻一には次のようにある。

闕而不書ノ事菩提心義云。唯法花等皆雖レ説ニ此三摩地法一。而伝法菩薩闕而不書^{云云}。法華等諸經中皆雖レ説ニ事理俱密旨一。伝法菩薩為ニ唯理秘密機^{其文ヲ闕略ス}ト釈也。其^{レモ}両部三摩地等行相ヲ闕略也。總不^レ明ニ真如言説相^{云ニハ非也}（大正七七・一九九下^{二〇〇上}）

法華等には此の三摩地の法が説かれていたのだが、「伝法菩薩」が闕して書さなかったのだ、それも両部の三摩地等の行相を闕略したのだ、としている。ここで注目すべきは、仁空が安然の『菩提心義抄』に依りつつも、闕略したものが「両部の三摩地等の行相」と、一步踏み込んで明言していることである。

この他にも仁空が「伝法聖者闕略」問題を論ずる箇所は多々散見され、その一部を挙げれば、『義釈搜決抄』天全十（三三上）（三七下^{三八上}）、天全十三（四〇五上）（七〇六上^下）等、『遮那業案立草』大正七七（二〇〇上^中）、『義釈第一私鈔』天全七（二五六上）（二五七上）（二五九上）（二五九下^{二六〇上}）等、である。仁空がいかに「伝法聖者闕略」問題に深く関心を払ったかを物語っているといえよう。⁽⁴⁾

安然が「伝法聖者闕而不書」を論じ、五百年後の仁空がそれを受けて「伝法聖者闕略」を頻繁に展開した理由の一端は、台密の立場から『菩提心論』の問題を解決するところにあったものと考えられる。すなわち『菩提心論』の「唯真言法中。

即身成仏故。是故説三摩地「於諸教中」。闕而不書。」(大正三一・五七二下)の一節を、どのように解釈していくか、という台密に向けられた課題に対し、まず安然が先鞭を付け、それを仁空が受容し、発展させたものが「伝法聖者闕略」論と考えられる⁵⁾。

以上のように仁空は安然の思想を受け継ぎ、一方で理同事異を展開しつつ、他方において「伝法聖者闕略」をもって理同事同の側面を推し進め、台密における円密一致思想を重層的かつ揺るぎないものにしたことが窺えるのである。

1 『義釈搜決抄』(天全十・三三二下)に「理同事異」の語が確認できる。

2 『金剛頂経疏』(大正六一・二二下)

3 大久保良峻氏『天台教学と本覚思想』p.166～169、p.321～322、同『台密教学の研究』p.83～84、p.199～205、同『安然の行位論』(印度学仏教学研究33・1)を参照のこと。

4 院政期の証真にも、安然の「伝法菩薩闕而不書」に触れるところがある。『法華疏私記』卷八末(仏全二二・六八〇下)

5 証真は『菩提心論』のこの問題に対し、『天台真言二宗同異章』(大正七四・四二〇下)で「唯真言法中」の「唯」の字を「此」の意に取って解釈し、台密の立場から会通を試みている。

〈キーワード〉 安然、仁空、円密一致、伝法聖者闕略、理同事異、理同事同

台密における円密一致思想・「伝法聖者闕略」について(土倉)

In the history of the subsequent Nichiren religious group, the term was interpreted variously. The opinion influenced by the interpretation of Japanese Tendai sect is also in it.

20. 'Denpō-shōja-ketsuryaku' as the Idea of *enmitsu-itchi* in Taimitsu: On Annen and Ninkū

Hiroshi TSUCHIKURA

The idea of *enmitsu-itchi* 円密一致 [The identity of the essential purport of the Perfect Teaching of Tendai and Esoteric Buddhism] is the basic position of Taimitsu 台密. There are two types of *enmitsu-itchi*: one is the idea of *ridō-jii* 理同事異 [The Perfect Teaching of Tendai is identical to Esoteric Buddhism in principle, but in practice each one is different], the other is the idea of *ridō-jidō* 理同事同 [The Perfect Teaching is identical to Esoteric Buddhism in both principle and practice]. Most centrally, Annen 安然 (841-898?) and Ninkū 仁空 (1309-1388) emphasized the idea of *ridō-jii*, and secondarily the two scholars referred to the idea of *ridō-jidō* too. The two scholars adopted 'Denpō-shōja-ketsuryaku' 伝法聖者闕略 as the idea of *ridō-jidō*, meaning "When the Buddha preached the practice of the three mysteries (*sannmitsugyō* 三密行) Denpō-shōja 伝法聖者 listened to the Buddha preach in his presence. But they could not record the practice of the three mysteries in a sūtra (*ketsuryaku* 闕略), because their faculties were not mysterious." Particularly Ninkū frequently referred to 'Denpō-shōja-ketsuryaku', and he constructed the idea of *enmitsu-itchi* much more solidly.

21. The Tiantai Doctrine of Kaihui (開会) and Benhuadiyong Bodhisattva ②

Kankyū YAMAUCHI

In this paper I would like to consider the cultivation of Yingsheng juanzhu and all living things that receive it, and the structure and the relationship of the two.